慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イソップ、東アジアへ
Sub Title	
Author	前坊, 洋(Maenobo, Yo)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1989
Jtitle	近代日本研究 Vol.6, (1989.) ,p.41- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図, 挿表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19890000-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イソップ、東アジアへ

前坊　洋

デメテルは、国事そつちのけでイソップのたとへ話に首つたけになつてゐる諸君に、立腹してをられる。
――デマデス

さう、わたしが中国にゐたころだよ。皇帝はコートをもつてゐた。けれど、こんなにすばらしくはなかつたな。――ブラッシ

と題せられてはいるものの、以下にささやかな検討をくわえようとする対象は、英訳イソップ譬喩談の、十九世紀日本ならびに中国への伝播の態様というにすぎぬ。

まづ、引用[1]からはじめよう。

They set out together; and though it was late in the evening when they arrived at the palace, they found the remains of a sumptuous entertainment――plenty of cream, jellies, and sweetmeats: the cheese was Par-

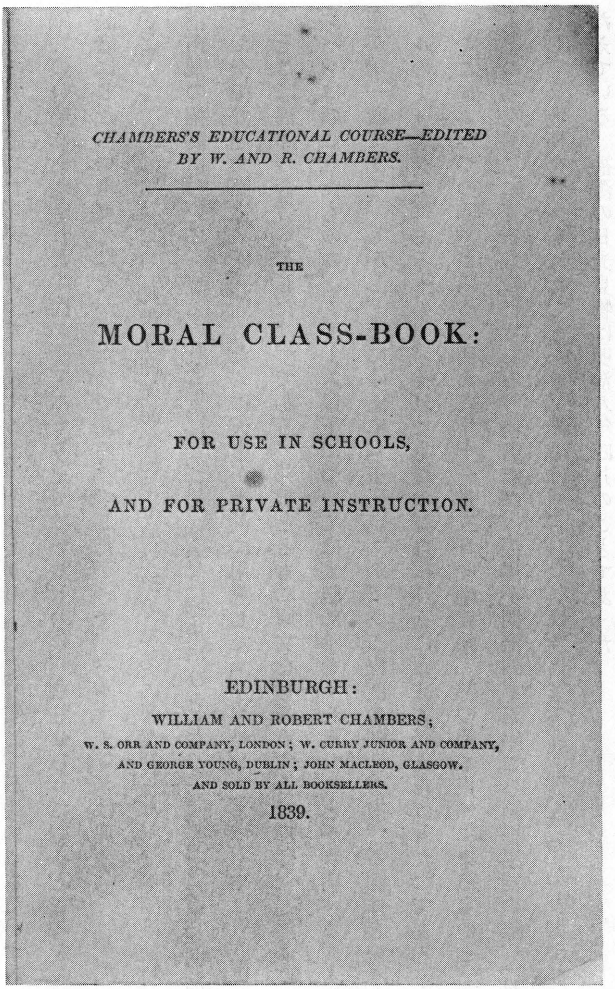
mesan, and they soaked their whiskers in exquisite champagne. But they were not far advanced in their repast, when they were alarmed with the barking and scratching of a lap-dog.

いまひとつ。

……二疋の鼠同道して御殿の方へ赴きけり道すがら日もはや暮て御殿に着せしハ既に初夜の頃なりしかども馳走の残物ハ沢山にて牛の乳もあり玉子焼もあり菓子の種類も一通りならず「ちいす」牛乳にて製したるものハ「ばるめざん」の銘産なり二疋の者ハこの馳走を味ひ極上の「ちやんぱん」酒に髯ハ浸して酒興いまだ半に至らず忽ち矮狗の吠るを聞て大に驚き……

後者が前者の翻訳である。訳者は福澤諭吉。その原稿序文末尾に「明治四年辛未四月」とみとめられる『童蒙をしへ草』中の一小部分として、福澤はこの文章を作成した。前年が大患の年であったゆえ、病後のつれづれをなぐさめるために、書物自体は成立したものであるかもしれぬ。五年中に初編三冊、二編二冊に分かって刊行せられたこの訳書の原典は、序文にみられるとおり、「英人「チャンブル」氏所著ノ「モラルカラッスブック」」、すなわち、The Moral Class-Book: for use in schools, and for private instruction.「英人「チャンブル」氏所著」の方には少々問題があって、これは版元エヂンバラのウィリアム&ロバート・チェインバーズ編の謂、版元はこの『モラル・クラスブック』をふくむ Chambers's Educational Course を編輯したのである。なお、明治四年といえば一八七一年にあたるゆえ、福澤手沢本は一八七二年の新版ではなく、一八六一年の新版[2]、もしくは、一八三九年の初版でなければならぬ[3]。

右の原典にいくつかのイソップ譬喩談がふくまれていたため、福澤訳は、日本のイソップ翻訳史において、偶然の所産ではあったが、新村出の「いはゆる英文系統本[4]」の嚆矢に位置する栄誉をになうこととなったのである。



CHAMBERS'S EDUCATIONAL COURSE—EDITED BY W. AND R. CHAMBERS.

THE

MORAL CLASS-BOOK:

FOR USE IN SCHOOLS,

AND FOR PRIVATE INSTRUCTION.

EDINBURGH:

WILLIAM AND ROBERT CHAMBERS;

W. S. ORR AND COMPANY, LONDON; W. CURRY JUNIOR AND COMPANY, AND GEORGE YOUNG, DUBLIN; JOHN MACLEOD, GLASGOW. AND SOLD BY ALL BOOKSELLERS.

1839.

The Moral Class-Book 扉 (The Bodleian Library, Oxford—26236. f. 11)

冒頭にかかげた小文も、現在「町鼠と田舎鼠」としてしられているものの一節であることは、すでにあきらかであろう。

その引用箇処を邦訳によって一読すると、とりどりの「馳走の残物」が注目にあたいする。チーズは『安愚楽鍋』の口絵[5]にえがかれた牛店の暖簾にもみえてはいるものの、割註せられているところをみれば、それはいまだ読者にしたしいものではなかったのであろう。したがって、パルマチーズは理解のほかであったに相違ない。「ちゃんぱん」は、幕末、日米通商航海条約批准書交換のために派遣せられた使節団副使村垣淡路守範正が、桑港市長の招宴について、「サンパン酒の瓶の口を切音は砲声にひとし」[6]としるして以来、明治七年、北京から帰国した全権弁理大臣大久保利通のために天皇が横浜に用意した「サンパン」[7]まで、やはり庶民のものではなかった。

そこに福澤の苦労も存したはずである。邦訳とともに原文をも参看するならば、福澤は、パルマチーズとシャンパンはのこしたものの、クリーム以下については大胆に手をくわえたことが判明する。もとより、読者への配意が第一義である。しかし、なにゆえに「玉子焼」か。ある程度の弾性を有する固体という点において、それもゲルのイメージではあるものの、それでもなお、なにゆえにたまごがえらばれたのであろうか。

ここにふたつの回想がある。明治三年十一月三日慶應義塾入塾の岡本貞烋[8]によるものと、同年十二月二十一日入塾の朝吹英二[9]によるものとである。前者には、福澤が明治四、五年ころ箱根湯治の際、「日々鶏肉又は鶏卵を食し、又熟柿を食べられた[10]」とあり、後者は、「日光の御旅行以来、鶏卵がすつかり御嫌ひになりました[11]」とつたえている。福澤の日光見物は明治八年四月のことであった[12]。

もちろん、回想には混乱と錯誤とがつきものであり、それに格別の信をおくことは危険である。しかしながら、慶応三年、再度の米行からの帰途、福澤自身が、横浜帰帆後に実現したい「献立」としてメモしたもののうちに、

「うなぎの玉子むし」のふくまれている事実[13]を考慮するならば、熟柿とともに食せられたたまごは、決して病後の滋養のために無理に摂取せられたというわけではなく、「すつかり御嫌ひになりました」と回想せられるほどの大好物であったと判断することが可能である。上引の翻訳において、福澤は自分の嗜好に引きつけて「玉子焼」を選択したのである。

かくして、翻訳は〈個性〉の問題である。さらに若干の対照をこころみよう。The Ant and the Grasshopperを福澤は「蟻と蟲螽の事」と訳した。もっとも、原稿においては、本文中二ヶ所の「蟲螽」をもふくめて、この振仮名はないのであるが、ともかく、「蟲螽」といえばイナゴ、「夕にハ月に歌」う存在ではない。露悪趣味的[14]な『福翁自伝』は、みづからを「野暮」・「無芸殺風景[15]」といったことばで形容してみせたが、盛夏にすだく機織虫も山谷がよいの螽斯船も、ともに福澤の「不風流[16]」が排除したものであろう[17]。

語彙にではなく、文章の全体に対しても、個性は当然機能する。右の「蟻と蟲螽の事」は、地の文を句点によってきる必要がないが、さらに、「麦畑の雲雀の事」にいたっては、会話文をふくめて、句点なしに読了することが可能である。ここに、徳富蘇峰が「瘠我慢の説を読む[18]」にもちいた「草間蛇の過ぐが如き委迤たる文句」なる評言を想起することは奇矯にすぎるであろうか。

ことに、後者は、原稿を一読すれば、補入の連続であることが判明する。しかして、and so she went out for provisions as before. に関して、「餌の詮義ニ」を補入したばあいのごとく、訂正の範疇におさめるべきものもあるが、"Well," says the lark, "there's no danger as yet." を、当初「親鳥ハ驚く気色もなく」としつつ、「いまた恐るゝニ足らずとて」を「親鳥ハ」以下に補入したやりかたなどは、意訳を直訳に変更するのではなく、直訳を附加したために全体が長文化し、「委迤たる」方向に一歩をふみだした好例である。

要するに、福澤の個性が得手とする文章作法は、削除よりも補入、短文よりも長文、分節よりも連綿を重用するものであった。かくして完成せられた文体が、汎用ではなく、ときとして逆効果をあらわすことも、また、必然である。たとえば、「風と日輪と旅人との事」、ここにおいては、おおきな補入は冒頭の「おの〳〵其力を誇り」のみ、また、原文の段落もそのままにいかされてはいる。しかしながら、原文がセミコロン二ヶ所、ピリオド五ヶ所を有するに対して、福澤訳に、句点をもちいるべきところはわづかに三ヶ所のみである。ことに、Next came the sun; who, breaking out from a thick, watery cloud, を「然る所に濃き雨雲の間より日輪静に見はれ出」とした部分などは、静態的な、情景描写的な、めりはりのきかぬ翻訳の特徴を集中的に表出している。それは「静に」の一語の附加によるものではなく、セミコロンの没却に主因は存するとせねばならぬ。

「蝦蟆の仲間に君を立る事」は、「蝦蟆の仲間に共和政事の法を立てしが何れも満足することを知らず早くも心変して自主自由の風を厭ひ」という話であるが、The commonwealth of frogs,……を右のごとくに訳しはじめた福澤の脳裏には、パリ開城前後のフランスの運命がおもいえがかれたに相違ない。明治三年十月二十二日附阿部泰蔵宛書翰の追って書[19]において、福澤は、「ナンダカ仏蘭西に勝タセタキよふに御座候」と、「レポブリックに相成」ったその国の肩をもっていたのである。

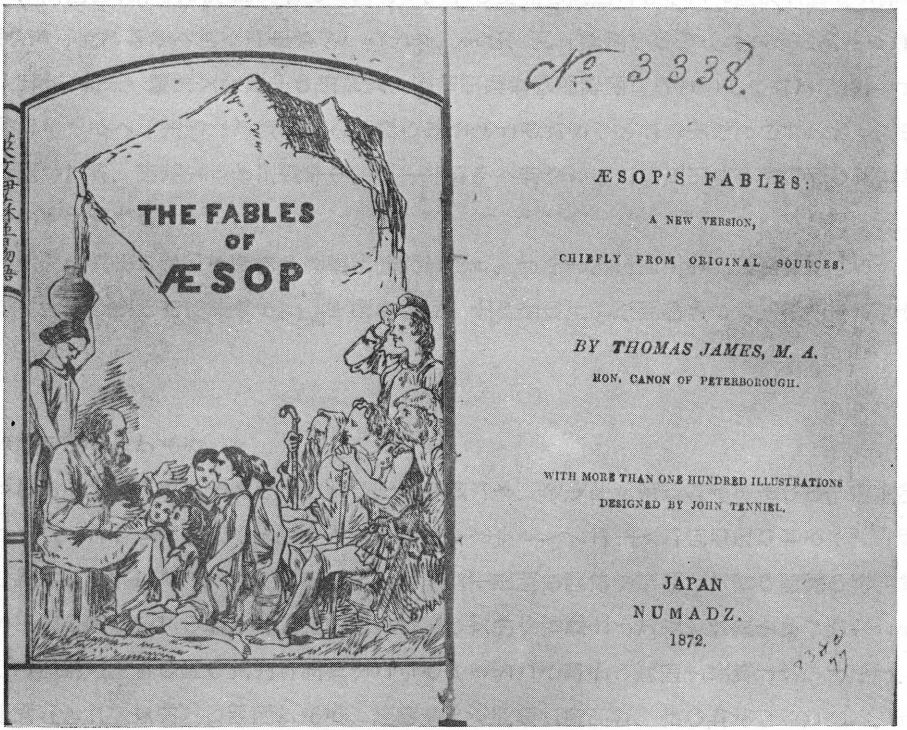
しかし、ここにいまひとつの問題は、「自主自由」のことである。原語は liberty、福澤がこれを単に「自由」としなかったことは、『西洋事情』初編巻之一五丁以下「政治」の周知の問題意識がいまにいきづけていたものとして感銘ふかい。そこにおいて、福澤は、「欧羅巴政学家ノ説」として、「文明ノ政治」の条件の第一に「自主任意」をかかげ、末尾に割註して、「英語ニ之ヲ「フリードム」又ハ「リベルチ」ト云フ未タ的当ノ訳字アラス」と犀利な洞察をしめした。「自由」の語が、伝統において、「我儘放盪」の意味を有することを知悉していた

のである。

かくして、翻訳はまた〈文化〉の問題である。福澤という明敏な個性は、右のばあいのごとく、ふたつの文化のはざまにおいて苦闘し、この国の文化に抵抗をこころみるところにその真価を発揮した。しかし、また、前出の「御殿の鼠と田舎の鼠の事」のなかに、福澤がこの国の文化を背景として立った例をみいだすこともできる。訳文のみをかかげれば十分であろう。「勝手の方より下女下男間毎間毎を掃除して宵の酒宴の跡仕舞塵一片も捨置かず跡ハ空しくなりにけり田舎鼠ハといきつき声を出すもやう〳〵に主人に向ひ云ひけるハ」。「跡ハ空しく」などは能がかりであるが、それはともかく、この引用以後にも、多少字あまりはあるものの、伝統的韻文の形式を発見することが可能なのである。

『童蒙をしへ草』刊行の翌明治六年から、『通俗伊蘇普物語』全六巻の刊行が開始せられ、[20] 八年末にいたって完結した。[21] すなわち、英訳系統本における最初の意識的翻訳[22]であり、しかも、二百三十七篇をおさめるという点からも、出色の作物たるをうしなわぬ。

訳者渡部温に関しては、福澤よりも三歳年少、二年半はやく世をさった幕吏出身の新政府の文官であって、蘭学、英学、漢学にあかるく、主として教育界に活躍の場をもとめたといった事実がしられており、出自、閲歴、著訳書は、『明治文化全集』飜訳文芸篇中の松崎實「通俗伊蘇普物語解題」にまとめられている。しかしながら、「氏の性格逸話などに就ては多く知るに由ない」ことも、また、同「解題」のいみじくも指摘するごとくである。[23] この点において、圧倒的な研究史が用意せられており、その個性的側面についても潤沢な情報を容易に入手する



『英文伊蘇普物語』乾口絵・扉（内閣文庫）

ことの期待できる福澤とは比較にならぬのも、いたしかたのないところである。それゆえ、ここにおいては、その翻訳における個性が、もっぱら翻訳自体のなかに探求せられねばならぬ。

なお、ここに使用せられる原拠は、渡部自身が沼津から出版した『英文伊蘇普物語』乾坤、すなわち、Thomas James の Aesop's Fables の翻刻本であり、「乾」の見返しに「明治五夏官許」とある。ちなみに、邦訳巻之一の見返しも、「明治五壬申官許」とせられる。

福澤と同様、渡部も冗舌体を使用することがあった。They, instantly detecting the intruder, stripped him of his borrowed plumes, が「孔雀は直にこのまぎれものを見出し。にくき奴かなと其仮羽を剪とり。」と訳され、and, turning to his son, が「遥か遠くの畑中に居る息子を呼んで。」と訳されるたぐいである。ここにあきらかなごとく、渡部の「補入」した部分は、原文にはないものであって、福澤における補入とはその性格を異にする。福澤は文章を長文化しはしたが、きわめて原文にこだわった。渡部は創作をいとわなかったのである。

Upon which he sent them a Stork, who no sooner arrived among them than he began laying hold of them and devouring them one by one as fast as he could, and it was in vain that they endeavoured to escape him. Then they sent Mercury with a private message to Jupiter, beseeching him that he would take pity on them once more; ……

天神是を聞給ひ。悪き奴等が願かなと。一羽の鷺を送り給ふ。その鷺下界に降るや否や。直に蛙を取り初て。次第〳〵に餌となしければ。蛙どもは驚き恐れ。天を仰て打歎き。「なにとぞ憐をたれ給へ救ひ給へ」と大声あげて。水神を以て詫奉れば。……

渡部の創作が加除あい俟つ技法によって支持せられることは、右の「蛙の主人を求る話」の対照がよく証するところである。

もとより、翻訳はなによりも原文の拘束をうけるのであって、ことなる原文によって翻訳を論ずることには無理もある。おなじく「蛙の主人を求る話」の冒頭の一節、In the days of old, when the Frogs were all at liberty in the lakes, and had grown quite weary of following every one his own devices, すなわち、渡部が「むかし或池に群蛙すみて。何事もゆるやかに。心まかせなりけるに。互に我慢の振舞まさりて。終に治りがたくなりければ。」と、意訳というよりも誤訳した箇所を、「共和政治」と「自主自由」とを、すくなくとも心情的には、愛した福澤であれば、如何様に訳してみせたか、興味をひかれるところである。

しかし、また、渡部訳は一種の風格を有する。「如何様御辺はきり〴〵すよな。汝は夏中何をして暮されしや。何故食に困らるゝや」。また、「ウム。夫じやア巣立をする時が来た。なんでも他に任せずに。自身で手を下すのは。切実なものだぞ。必らず油断をせぬがいゝ」。前者は「蟻と蟲螽の話」の「古老の蟻」、後者は「告天子と雛の話」の「母鳥」である。キリギリスはやはり「蟲螽」で、それを「きり〴〵す」とよませているのであるが、渡部訳には、特に斯様な会話文において、読本風の古典趣味が存する。ただし、としよりと母親とのえがきわけのごとき個性の描出にまで渡部の筆のおよんでいないことは、言をまたぬ。

ところで、後者の出だしは、「麦穂の将黄れる頃。畑中に巣を作り居る告天子ありしが。」となっている。原文は、There was a brood of Young Larks in a field of corn, which was just ripe, である。福澤の方は、「卯月の天気暖なる麦の畑に巣をかけて雛子を養ふ雲雀あり」。おなじく、In a ripe field of corn, a lark had a brood of young ones; である。ここにおいて、福澤は渡部流の創作をもおこない、むしろ渡部が原文に忠実なのであるが、麦秋の表現において、両者ともに ripe に拘泥することはない。すなわち、文化の文脈にのったのである。

同様の共通項がいまひとつ、福澤が「秋過ぎ冬もはや来り」、渡部が「夏もすぎ秋もたけ。稍冬枯の頃になりて」とでだした例の「アリとキリギリス」、原文はそれぞれ、In the winter season, また、On a cold frosty day[24]である。これは、この両者にとどまらず、仮名草子の『伊曾保物語』にある「蟻と蟬の事[25]」の冒頭も、「去程に、春過夏たけ、秋も深くて、冬のころにもなりしかば」とせられている。「去程に」は慣用の出だし、「ある時」ほど頻出はせぬものの、『伊曾保』中に、同様の使用法十四例を発見することができる。[26]

しかして、同書のなかに「春過夏去りて、秋風立ぬる比は」[27]ともみられるとおり、四季の変遷の叙述も、また、慣用なのである。たとえば、[28]『平家物語』巻第一「祇王」に、「かくて春すぎ夏闌ぬ。秋の初風吹ぬれば、星合の空をながめつゝ、あまのとわたるかぢの葉に、おもふ事かく比なれや」[29]とあり、また、謡曲「芭蕉」のクセにも、「春過ぎ夏闌け、秋来る風の音づれは、庭の荻原まづそよぎ、そよかかる秋と知らすなり」[30]とある。もえ出るもかるゝもおなじ野辺の草いづれか秋にあはではつべき[31]と、祇王は仏と自分との同様の運命をうたったが、また、やぶれてのこる芭蕉葉が諸行無常の象徴でなくして一体何であろうか。常住不変のものは一切ないということを、この国の文化は四季のうつろいのうちに観じきたったのである。

渡部が正当にも、「夏に稼ぎし余徳は。冬になりて顕るゝものじやぞ」と、一篇の主旨が「資本主義の精神」の宣揚に存することを、教訓として附加せられた末尾の一行に指摘しているにもかかわらず、[32]また、福澤が原典の Frugality を訳して「倹約の事」とした「第十三章」の最初にこの「寓言」がおさめられているにもかかわらず、明治の思想界にアリの人気の沸騰することはなかった。わづかに北村透谷が「智慧者のほまれ世に高き／蟻」[33]をミミズにいどませたが、「アリとキリギリス」が「夏もすぎ秋もたけ」の文脈で受容せられるかぎり、アリの主役となることはかなわなかったのである。

渡部は『通俗伊蘇普物語』を、「身を修め家を斉へ友に交り国を治むるの要僅々の一小話中に皆含畜（ママ）す」るがゆえに、「後来教育の開進に従て需用漸く多を加へ遂に全国の小学に於て此書を用ゐざるなきに至らん」と予想していた。[34] しかして、刊行以来、諸学校の修身訓に使用せられ、明治十四年十一月までに数千部をうりあげるのであるが、同年五月四日に小学校教則綱領がさだめられると、千葉県その他数県において、修身重視の方向にそって、これを教則中に採用するところがあらわれた。ちなみに、全六冊の定価は一円五十銭であった。[35]

売れゆきはその後も順調であり、明治二十二年一月までに一万部をさばいたが、板木の磨滅を機として、同年二月、収載話数を二百八十に増加せしめ、価格を七十銭と低廉にし、洋本一冊仕たての『改正増補通俗伊蘇普物語』が刊行せられた。これには、おなじく洋本一冊の『改正増補通俗伊蘇普物語原書』が定価五十銭でそえられていた。[36]

この無尽蔵書斎主人渡部温の事業について看過しえぬものは、中田敬義翻訳にかかる『北京官話伊蘇普喩言』の刊行である。すなわち、明治十二年四月「無尽蔵書房印行」、定価七十銭、漢語学習者を読者として想定し、[37] 同八年七月から十年一月まで渡部が校長をつとめた東京外国語学校[38]の教科書としても採用せられるところとなった。[39]

中田は石川県の人、明治四年、旧金沢藩が漢語学学習を目的として東京に派遣する三名のうちに選抜せられて上京、さらに同九年、外務省の命を奉じて北京へわたるのであるが、出発に際して『通俗伊蘇普物語』翻訳を依嘱せられたとは、中田みづからがその訳書「小引」にしるすところである。

明治二十三年九月十六日附『時事新報』には至極簡単な体裁の中田の帰朝広告が掲載せられているが、これが中国からのものか、また、頻繁に往来していたものかは判然せぬ。なお、中田の文章には、明治九年三月刊の

『北京官話伊蘇普喻言』表紙（慶應義塾図書館）

『東洋紀聞』第二、同十一年六月六日附『朝野新聞』などにおいても接することができる。また、『日英条約改正記事』は、同二十七年八月、「外務大臣秘書官中田敬義之ヲ編纂」したものである。

さて、その翻訳であるが、福澤が「玉子焼」を登場せしめた話が、ここにおいては「二鼠相請」と題せられ、「無論豆子・麦子・酪乾児・酒糟、随其所有、拏出来待承他」と、田舎における献立が詳細である。渡部訳では「豆麦酪糟何くれとなく。あるに任せてもてなすに。」であって、「しめかす」は「糟」のみにふられたものであろう。この「しめかす」が「酒糟」では、英文の nuts との懸隔がはなはだしすぎる。英文に列挙せられる食物は、peas and barley, cheese-parings and nuts の四種、したがって、三番めについては、邦訳・漢訳ともに万全とは称しがたい。類似の一例は「蟲螫」、本文においては、「珸珸児」が三ヶ所すべてに使用せられているが、中田は「蟻誡蟲螫」と題名にそれを流用した。

「アリとキリギリス」には、若干の翻訳上の問題が存する。「古老の蟻」に対する「一個有見識的老螞蟻」などは説明的にすぎるようであり、「古老」でも大過あるまいとおもわれるが、さりとて、誤訳とは断じがたい。しかしながら、「這夏天、我很快活、眠花宿葉」は、渡部訳が「此夏はいと面白こそありつれ。花に戯れ葉に眠り。」であるから、「眠花」は原文からはなれすぎ、しかも、「宿葉」につきすぎるきらいがある。

より単純な脱落は、たとえば、「鴉粧孔雀」の「飛入孔雀羣児裡」、原文の「美しき」は訳出せられていない。直後の「大家一斉用嘴鴿着、趕出去了」は、「嘴をそろへて」の謂には相違ないものの、ややものたりぬ感がある。斯様な非充足感は、「二鼠相請」のおわりちかく、「寧落付た安心の処で麦飯を食ふ方が余程好御座ります」の「麦飯」が「粗飯」とせられたり、「父遺子地」において、「其出来秋に至りては。」が「到結果的時候児」とせられたりするときにきわまる。脱落は、もし必要とみとめられるならば、おぎなえばことたりる。それに対して、

たとえば、「出来秋」のコノテイションをうつすということは、ここに「其出来、秋に至りては」と句ぎるにもせよ、まさに至難のわざである。

おなじく「父遺子地」にみられる「他們纔明白父親的遺言、説的是這個」などは、反対に、漢語独得の言いまわしといえよう。原文は、「亡父の遺言は是なりけりと。兄弟初て其意を悟り。」である。「二鼠開懐暢飲、正在談笑得意之間、唿的一声、屋門開了、闖進一夥子酔漢来、二鼠唬得魂飛魄散」も、「二」と「唬」には疑問があるものの、漢語表現の二特徴、簡潔と誇張とを駆使して、原文の「賓も主も打とけて。かたり楽む真最中。部屋の戸がらりと押開き。一組の酔客突入れば。鼠どもハ仰天し。」を凌駕したと評して過言ではない。「風日比力」冒頭の「有時候児、太陽和風伯争強、弁論不休」も、「或時日輪と風との間に。いづれの力か強からんとのせんさく有て。争論果しなし。」に比し、格段に歯ぎれのよい文章となっている。

漢語の孤立語的特性が中国人の思惟自体の特性の表出であるごとく、漢語の語彙の特性も、また、中国人の思惟自体の特性の表出でなければならぬ。「呆鴉の話」において、渡部が、Had you been contented with what nature made you, を「てんたうさまがさづけさつしやつた分際を守つて居たなら。」と訳して、それにわざわざ「造物者賦与之(分際)」と漢語をあてはめ、「てんたうさま」以下を振仮名にまわした箇処、にもかかわらず、中田が、その「造物者」の語を流用せずに、「要是你安分守己児的」と、きわめて簡単な作文にとどめたのは、それが、たとえば、『荘子』において、「彼方且与二造物者一為レ人、而遊レ乎二天地之一気一」(大宗師篇)[40]ともちいられるがごとき哲学的存在であり、その哲学性がこのちいさな話には邪魔と判断せられたからであろう。かくして、コノテイションは、原語においてと同様に、訳語においても問題とせられざるをえぬ。

「蛙の主人を求る話」の「天神」は、原典においては Jupiter、「水神」は Mercury である。前者、福澤訳の原

典はおなじく Jupiter、これを福澤は「雷の神なる木星」と訳していた。ちなみに、後者は英文にも登場せぬ。しかして、中田訳「使鷺食蛙」の前者は「老天爺」、後者は「龍王爺」である。マーキュリーの、使者としての契機はすでに渡部訳においてうしなわれているのであるゆえ、漢訳は成功と評価せられねばならぬ。同時に、中田が「鴉粧孔雀」において、漢語の語彙のうちに「てんたうさま」程度のことばを発見する努力をおこたったことも、ここにあきらかである。

この「蛙の御主人」は、すでに福澤訳によって了解せられるとおり、きわめて政治学的な作物である。自治の伝統化[41]に反撥したカエルたちは、ジュピターに王をあたえてくれるようにねがった。ジュピターが最初になげおろしたものは、権威としての丸太であった。当初それにおそれをいだいたカエルたちは、それをとおまきにするのみであったが、やがてその無力を看破した彼らは、ジュピターにあらたな王をのぞんだ。しかしてあたえられたものは、カエルをえさとする、権力としての鳥であった。カエルたちがジュピターに三回めの哀願をこころみると……。and fond of change を、「何とかして其政事の様を変んものをと思ひ」と訳した福澤は、すでにあきらかなごとく、一文の政治学的意味に通達していた。a King to keep them in better order, and make them lead honester lives を「我輩を統御ゆべきよき主人」と訳した渡部と、さらにそれを「一個管理我們的好主人」と訳した中田とはどうであったか。

訳文を通読するとき、「すべひきゆべき」存在としての「丸柱」に対して、「管理」すべき役割を期待せられた「円柱子」はかなり唐突である。それに対して、「一個有威勢的主人」としての「鷺鷥」の出現はむしろ自然である。しかして、結末は、福澤のばあいとはことなり、「天神是を聞給ひ。」と、その度量と訓戒とがしめされるのであるが、中田訳の「老天爺准了」は、ふたたびいかにも唐突である。中田訳は、その題名を「使鷺食蛙」とし

たことからも推察せられるごとく、重点を管轄弁理においているのであって、リーダーシップの中心を権力装置にもとめたといった感触の翻訳なのであるが、これが訳者の個性によるものか、はたまた文化の特性によるものかは、にわかに判別しがたい。[42]

『北京官話伊蘇普喩言』は、三篇の、いづれも漢文の「序」を有する。それぞれ、英国人、中国人、米国人の撰になるものであるが、その第一、すなわち、艾約瑟(Joseph Edkins)[43]が一八七八年四月北京の福音堂においてしるしたものに、つぎの一節がある。「曩時英国人、羅伯淡、為寧波領事官時、曾訳有中華文理一本、広東土白一本、但所訳未竟、乃道光年間事也」。

ここにいわゆる「羅伯淡」は Robert Thom、現代中国語においては罗伯特・汤姆[44]と表記せられる。その『意拾喩言』(Esop's Fables)には、後述のごとく、上海版、香港版などもあり、一八四〇年、道光二十年の広東版が、同年五月十五日澳門の総序を有して、原版と推定せられる。「喩言」八十二[45]をおさめるのみであるが、中田訳とおなじく、漢語学習者を対象としたとその本序にある本書は、さらに親切に、頁中央に横書の漢訳をおき、左にその意訳と直訳のそれぞれの英文、右に南京音・広東音[46]双方の音訳をおいている。これも中田訳同様、中国人の手になった翻訳ではないというらみは存するものの、英訳イソップの漢訳を論ずるについては、逸すべからざる対象たるをうしなわぬ。

まづ、福澤訳ならびに渡部訳の原典と対比して、筋だて自体に若干の相異がある。「二鼠」のネズミはともに田舎のネズミで、しかも親戚であり、いまは都ずまいの一匹の招待に応じて上京した他の一匹を驚駭におとしい

To
The Editor of
The Asiatic Journal.
1841

意拾喻言

ESOP'S FABLES

WRITTEN IN CHINESE BY THE LEARNED

MUN MOOY SEEN-SHANG,

AND COMPILED IN THEIR PRESENT FORM

(**With a free and a literal translation**)

BY HIS PUPIL

SLOTH. Robert Thom Esq.

孤掌難鳴

It is difficult for *a single* palm of the hand to emit a sound.

CHINESE CLASSIC SAYING.

五湖四海皆兄弟
人生何處不相逢

Those of the Five Lakes and those of the Four Seas (Chinese and Foreigners) are all BRETHREN!
Where may not members of the family of MAN meet by accident together?

CHINESE PROVERB.

Alas! poor Caledonia's mountaineer!
That want's stern edict e'er, and feudal grief,
Had forced him from a home he loved so dear!

CAMPBELL.

* * * *
* * * *

Land of my Sires! what mortal hand!
Can e'er untie the filial band,
That knits me to thy rugged strand?

SCOTT.

PRINTED AT THE CANTON PRESS OFFICE.
1840.

『意拾喻言』扉（東洋文庫）

れるものは犬のみである。「鴉挿仮毛」のカラスが身によそおうものは、クジャクの羽ではなく、あまたの鳥の羽であり、お里のしれるのはなき声によってである。「日風相賭」において、旅人による腕くらべを発案するのは太陽であり、それは、雲ひとつない空から終始きわめて戦闘的にてりつける。「農夫遺訓」の農夫は、息子たちが銭や宝が畑にうめられていると勝手に想像するようなおもわせぶりの遺言をするのではなく、「金窖（a golden hoard）」ということばを明瞭に使用するのである。「牧童説謊」の牧童が虚言をもちいるのは、彼にオオカミからヒツジの群をまもることを命じたその主人に対してであって、村人に対してではない。

「蛤求北帝」において、「木塊」のつぎにカエルたちにあたえられる「国王」は、天草版のツル[47]、仮名草紙のトビ[48]ともことなり、ただギリシャのイソップ[49]にて、「長蛇」である。しかしながら、伝統化の最大の弱点である厭きを体現したこの「喜動不喜静」のカエルたちによって、「国王」をたまわれとひたすらにねがわれる「北帝」とは一体何であろうか。

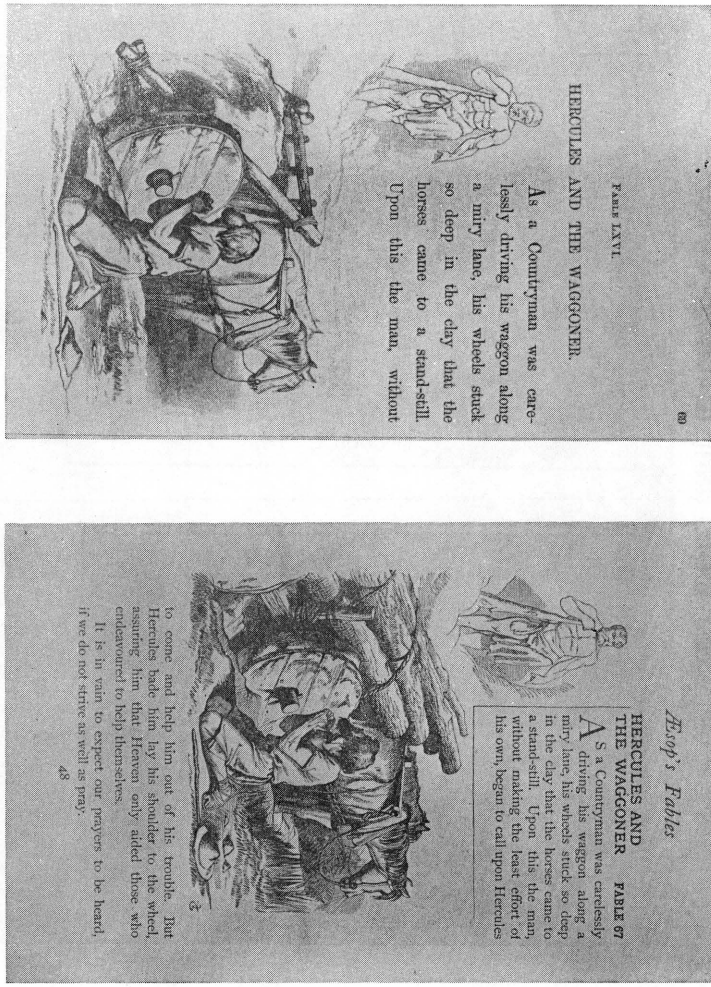
題名の意訳は、The Frogs beg Jupiter for a King. と、やはりジュピターが登場するのであるが、直訳の方は、Frogs beg Pih-Tē (or Northern Emperor, a great god among the Chinese.) とせられる。しかして、本文中二ヶ所の「北帝」にはすべて音訳があてられ、五ヶ所の「帝」には、意訳の方には「北帝」の音訳が、また、直訳の方には「帝」の音訳が、それぞれあてられている。ところが、このほかに「上帝」がただ一ヶ所存在し、これは the supreme god と意訳せられ、また、Supreme Tē と直訳せられる。要するに、トームは、ゼウスもしくはジュピターにあたる概念を漢語にもとめつつ、「北帝」にかたむいたのであるが、supreme なる存在としての「上帝」をすてきれなかったのである。

そもそも、「北帝」ということばは漢語辞書のうちに発見しえぬ。「上帝」であれば、「天帝」と同義のものと

して、その用例を古典のうちにみいだすことは容易である。したがって、既製語の流用をこころざすのであれば、「上帝」が過不足のないところであるかもしれぬ。しかし、問題は、A sort of Supreme God, is in the ancient books expressed by 上帝 Shang-te. という文章が、英国の先達 Robert Morrison によってしるされていたという事実である。トームは、ここにキリスト教の God の出現することをきらって、北陰大帝の簡称としての「北帝」にきわどく邂逅したのである。後出の Walter Henry Medhurst を一方の旗頭とする訳語論争は、キリスト教中国宣教史における四〇年代の一大イシューであった。(51)

漢文の題名が「蛤求北帝」と同一の構造を有する話が、いまひとつ収載せられている。すなわち、「車夫求仏」であり、直訳も Waggoner begs Fō. なのであるが、この意訳は The Waggoner and Hercules. であって、物語の内容上の必要から、祈願の対象はゼウスの子ヘラクレス、かの大力無双の英雄とせられている。これに対応する漢語が「仏」であり、本文中においては、たとえば執金剛ではなく、「阿彌陀仏」とせられるのは、やや奇抜の感をまぬかれぬ。ちなみに、「阿彌陀仏」に対する英文の説明はあたえられていない。

ともあれ、ヘラクレスに対するに「仏」が援用せられたのは、「仏果降臨問曰、你有何事相求」という、「車」をあつかいかねて助けをもとめる「車夫」のもとへの天くだりの必要性からであったであろう。この部分の意訳は、Fō (it is said) in very deed descended (from the sky), and asked him, saying, "what is the matter that you are thus begging me to assist you?" である。たとえば、『管子』の「虚二其欲一。神将二入舎一。掃二除不潔一。神乃留処」(心術上篇)(52) という箇所は、斉における神霊降下儀礼の存在を証拠だてているが、(53) しかしながら、モリソンを再度参看するならば、上引の文章の直前、すなわち、God の項の書きだしは、God or the Deus of the Chinese was originally, and is still most generally 神 Shin; とせられているのであるゆえ、トームがこ



FABLE LXVI.

HERCULES AND THE WAGGONER.

As a Countryman was carelessly driving his waggon along a miry lane, his wheels stuck so deep in the clay that the horses came to a stand-still. Upon this the man, without

Æsop's Fables

HERCULES AND THE WAGGONER FABLE 67

As a Countryman was carelessly driving his waggon along a miry lane, his wheels stuck so deep in the clay that the horses came to a stand-still. Upon this the man, without making the least effort of his own, began to call upon Hercules

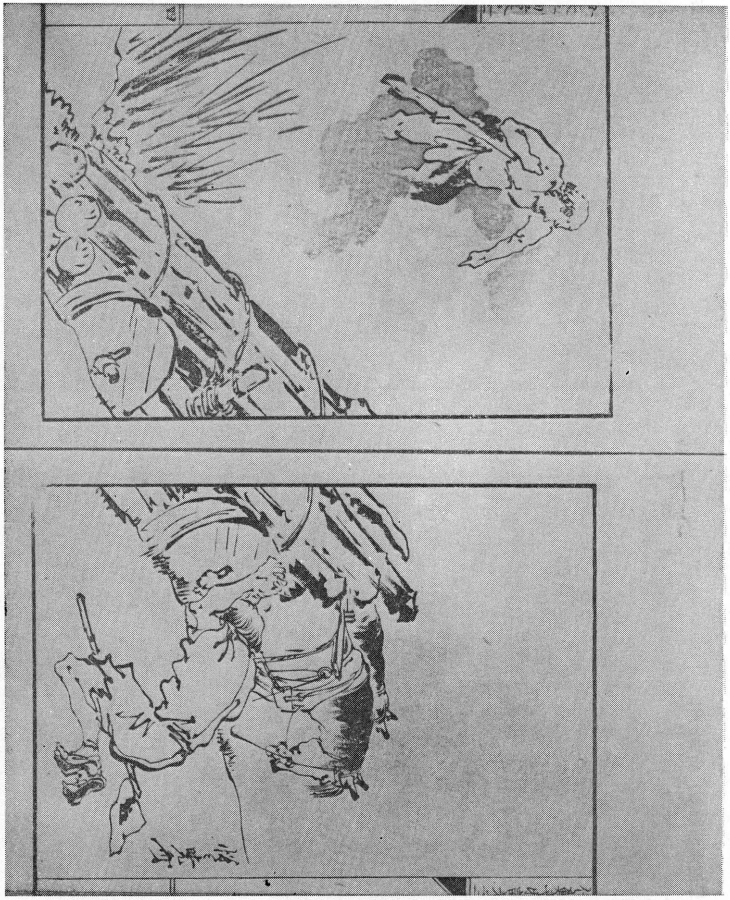
to come and help him out of his trouble. But Hercules bade him lay his shoulder to the wheel, assuring him that Heaven only aided those who endeavoured to help themselves.

It is in vain to expect our prayers to be heard, if we do not strive as well as pray.

48

1848年版　　1898年版（慶應義塾図書館）

Aesop's Fables 挿絵 (John Tenniel)



『通俗伊蘇普物語』51話挿絵（河鍋暁斎・内閣文庫）

こに「神」の使用を容認しえぬことは自明なのである。

ひるがえって、英訳イソップをみわたせば、チェインバーズは Hercules, looking down from a cloud, bid him not lie there, like an idle rascal, as he was, but……、また、ジェイムズは But Hercules bade him lay his shoulder to the wheel, とせられており、いづれも「降臨」を叙述するところがない。

しかるに、福澤は、「不思儀なるかな一片の黒雲天降りて神体を顕はし命ぜられけるハ見苦しき奴かな何故に斯く平伏するや……」、また、渡部は、「権現さすがに見過し給はず。忽ち天降ましく〳〵て。「汝徒に我のみを頼む事なかれ。汝先っ汝の肩を車にかけ。手をもつて輪を一塗に押べし」。と、いづれもかなり冗舌な「天降り」の訳をつけている。渡部の「権現」は「ヘルキュス権現」であり、福澤は「へるくりす」をそのままに天くだらしめ、しかも、その原稿の当該箇所に添削の痕跡は皆無である。これを要するに、両者は、主役を日本のカミになぞらえたか否かとは無関係に、ヘラクレスの行為自体をこの国の文化の文脈にしたがって、それゆえにこそ、きわめて円滑に叙述したのである。(54)

なお、中田訳の「神論車夫」が、「大力神果然不白瞧着他、就降下来、教訓他説」と、「神」を天くだらしめたのは、彼我の文化の共通性を考慮すれば当然のことである。それに対して、トームが、括弧にくくってまで、from the sky を意訳にくみこんだのは、『意拾喩言』の英語圏初学者むけという性格に配慮したものであろう。

英訳を直接手にするよりもはやく、『意拾喩言』系統の一本が幕末の日本につたえられた。それは広東版では

なく、「上海施医院の活字刷板」であり、「喩言七十三条」をおさめていた。[55] くだって明治九年十月二十日、大槻磐渓「序」、阿部弘国訓点による『漢訳伊蘇普譚』が東京において刊行せられた。見返しに「香港英華書院原刻」とあり、おなじく譬喩談七十三則をおさめる。また、明治三十一年七月十七日には、林外前田儀作編纂、筑山小野辰三郎訓点の『漢訳批評伊蘇普物語一名伊娑菩喩言』が刊行せられ、やはり七十三則をおさめた。この原「叙」には「同治七年春三月」とあって、わが明治元年にあたるのであるが、傍題の「伊娑菩喩言」が、幕末の写本に冠せられた題名と共通するところから、原本は上海版の翻刻かとも思量せられる。[56]

ともかく、いづれも七十三則を有するところがいちじるしい特色である。『意拾喩言』よりすれば九則を減じてはいるものの、収載談題名の異同、文章の相異、ともにほとんどとるにたらぬ。いま、『意拾喩言』の「二鼠」を基準とし、新村出記念財団重山文庫蔵写本『伊娑菩喩言』を甲、阿部訓点本を乙、小野訓点本を丙として、文章の差異をしめせば、左のごとくである。なお、読点は重山文庫本による。

村落中有二鼠、本属親誼、一在京師過活、忽一日来村探旧、村鼠留而欺之、所出之食、粗臭不堪*、京鼠曰、汝居無華屋、食無美味、何不随我到京一見世面、村鼠欣然同往、及到京果然食用皆異*、一日二鼠同酌、鼇来一雄犬、幾将村鼠攖去、村鼠大駭、問曰此処常有此害乎、曰然、村鼠辞曰、非我之福也、与其傍徨而甘旨、孰若安静而糟糠、俗云*、寧食開眉粥、莫食愁眉飯、即此之謂也、

「有」、乙になし。
「臭」、乙丙「悪」。
「食」、甲「日」。
「鼇」、甲乙丙「驀」。
「俗云」、丙「評曰」。
「莫」、甲乙丙「勿」。

また、明治十三年十二月三日刊の『攀龍雑誌』初号に、「諭言二則」として、この「二鼠」と「犬影」とがよ

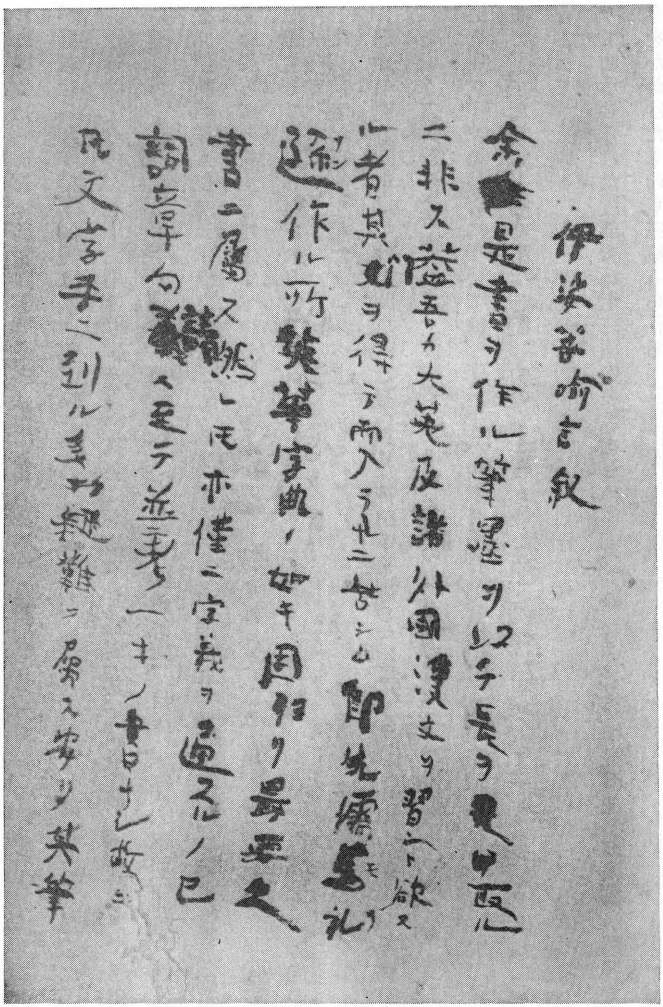
みくだされているが、阿部の訓点本によったものではないとおもわれる。

斯様な『意拾喩言』系統抜粋の歴史[57]はふるく、吉田松陰は香港最初の漢語月刊紙『遐邇貫珍』[58]一八五四年一月号[59]に掲載せられた「馬鹿同遊一則[60]」、すなわち、「馬思報鹿仇」をかきとめ、『桑華新話』には「四肢反叛」一則が掲載せられ[61]、栗本鋤雲は『伊娑菩喩言』のうちからすくなくとも二十余篇をよみくだした。

松陰はその後、七十三則の写本一見の機会にもめぐまれ、「其斧頭求レ柄、不下甚似中仮二下田箱館一之事上乎、猟戸逐レ兎、不下甚類中借二手米利一、以拒二諳仏一之策上乎、鴞狐狼犬、自謀レ騙レ人、不二一而足一、因使二岡部生写蔵一焉、欲レ問二執西洋人仁矣云尓者之口一也[62]」と跋文をしるした。明治九年訓点本出版の約半年後の広告は、「実に方今漢文を綴らんと志す者の欠くべからざる善本なり[63]」とむすばれていて、出版の動機が二年半後の『北京官話伊蘇普喩言』に通ずることをしらされるのであるが[64]、もとより、イソップの読みかたとしては、その方向の当否はともかくとして、前者が正鵠を射たというべきである。

周知の慶応四年『中外新聞』に録せられた神田孝平訳[65]の三編[66]は、「喩言一則」と題して譬喩談の題名をかかげぬという方式が、『遐邇貫珍』を踏襲してはいるものの、内容自体は『意拾喩言』系統とはいいがたい。漢文以外のイソップの抜粋については、明治十八年六月十日創刊の『ローマ字雑誌』が、翌年十二月十日刊の第十九号まで、すなわち、その第「一冊」中の「こどものため」の欄に、ローマ字によって訳出したものが、もっともよくまとまっている[67]。創刊直前の新聞報道は、創刊号のそれを外山正一訳としたが[68]、全体においては、「＊」をもって明示せられた渡部訳が十三編の多数をしめ、「＊」のないものにも渡部訳の影響が顕著である。なお、訳者名をかかげたものも三編みられる。

英訳系統本の受容に際して、明治の日本人がしめした関心の概要は、「こどものため」という限定つきながら、



栗本鋤雲『伊娑菩喩言』上２丁オモテ（天理図書館）

後掲の一覧甲によってしめされるであろう。毛利元就の故事をおもわしめる「薪の束の話」は、題名をかえてそこに二回登場し、「あほう鴉の話」は、あるときは「民権ノ仮面ヲ粧ヒ諸民ヲ欺蒙スル者」[69]を討つ際に援用せられ、また、あるときは「唯だ官邸に賃馬車に礼帽（シルクハット）に扁幅を飾つて言語挙措を尊大にし只管大臣若くは勅任の威厳を装ふに汲々たる」[70]人士の攻撃に有効であった。品川彌二郎は「亀と兎の比喩」を頻用することで有名であり[71]、竹越與三郎は幕府を、「その腹を膨脹せしめて、京都の大牛に当らんとして、遂に自ら破裂」[72]したカエルにたとえた。

竹越は譬喩談の愛読者であったらしく、受け手に理解せられやすい譬喩的慣用句が日本には不足していることを指摘するに際して、「葡萄が未だ青い」の例をもちいたこともある[73]。この話は『ローマ字雑誌』には採録せられなかったが、人望をあつめたもののひとつであり、『即興詩人』にあらわれるはるか以前[74]、明治九年六月十四日の『朝野新聞』には、「狐狸観二葡萄一」と題して翻訳がなされている。

中国における『意拾喩言』の受容については、積極的嗜好という観点よりすれば、云々すべき十分な資料を有せぬ。しかしながら、八十二編のそれが、すくなくとも上海と香港とにおいて、七十三則の形態によって流布したということ、すなわち、後掲の一覧乙によってしられる八編の減少という事実は、消極的にせよ、ひとつの手がかりに相違ない。

もちろん、「上海施医院」は医療伝道施設であったであろうし、「香港英華書院」は英国の教育機関であったから[75]、八編の削除に関して、中国文化の介入をいうことは早計である。『漢訳伊蘇普譚』発行者青山清吉による上引の新聞広告も、原版を、「支那にて英人の漢文を学ばんとするものゝ為に設けし所の初学作文の楷梯」[76]と称しているから、『意拾喩言』の意図は、香港版においてもいかされていたものとおもわれる。

しかしながら、英華書院は、また、『遐邇貫珍』の発行元として、その表紙に名前がみられる。その初代編集者メドハーストは、かつてバタヴィアの漢語月刊紙『特選撮要毎月紀伝』の編集者であり、そのもくろむところは、華僑を通じての中国内地への浸透であった。[77] それゆえ、『遐邇貫珍』に分載せられた譬喩談を「香港英華書院版」としてまとめたものであれば、あるいは、その逆であったとしても、そこに中国人むけの配慮をよみとることは十分可能なのである。

『漢訳批評伊蘇普物語』見返しに「大清国　大儒某反訳」とあるのは、『意拾喩言』の表紙にいわゆるトームの「蒙昧先生」に引かれたものであったかもしれぬが、これも『意拾喩言』の「叙」をうつした原「叙」は、「欲習漢文者」を「欲レ習二英文一者」とかえているのである。

しかして、長州の山県半蔵が松陰の一読に供した『伊娑菩喩言』の原本、すなわち、上掲の「上海施医院の活字刷板」が、「某氏」の手によって「俄艦中に獲」られたのは、[78] 安政初年のことと推定せられ、あたかも『遐邇貫珍』創刊と符節を合していた。もとより、露艦が出版直後の上海版を船載したとする根拠は皆無であるが、一八四三年以降、上海がメドハーストの常駐地であったことも無視しえぬ事柄である。[79]

『遐邇貫珍』の「近日雑報」欄に太平天国関連記事が頻出することからもしられるとおり、[80] 当時はその南京占領直後の昂揚期であり、しかも、西欧列強がやや清朝支持にかたむきかけた時期であった。[81] 在上海の英国領事館通訳官であるとともに新教の伝道者であったメドハーストには、[82] 洪秀全の「上帝」とのあいだに一定の距離をたもつとともに、イソップの「上帝」を、しかして、その「神」をもきらうべき十分の理由が存したのである。

ちなみに、メドハーストの一八四二～四三年バタヴィア版、二巻合冊の『漢英字典』は、第一巻「上」の項に「上帝」はなく、第二巻「神」の項には、Shin, The celestial gods, who draw forth or develope all things.

をもってはじまる説明と、おおくの熟語の掲出と、さらにその説明とが丹念になされている[83]が、おなじく一八四七～四八年上海版、二巻合冊の『英漢辞典』、第一巻 God の項は、the Supreme Being, 上帝 shàng tè, をもってはじめられることとなるのである[84]。

かくして、中国の〈文化〉に対する斟酌の結果か、〈状況〉の所産かを截然と判断することは不可能ではあるものの――特に後者については、七十三則本の出版が拝上帝会興起以前であることもありうるのであるゆえ――、たとえば、「蛤求北帝」は『意拾喩言』翻刻本から抹消せられることとなった。同時に、漢訳をとおして西洋をまなぶという定型の方式によって、たとえば、「船中八策」の筆者が、自治の思想と権力の暴虐とについて学習する機会も、当面きえさったのである。

ところで、キングズ・コレッヂの James Summers が一八六三年にあらわした A Handbook of the Chinese Language, Part II に、『意拾喩言』から八編がとられており、そのうちの一編は、七十三則本にはない「車夫求仏」であることは、上海、あるいは、香港における選択と、倫敦における選択との相異をしめして興味ふかいが、このサマーズは、明治六年十月九日に、夫人と四人の子供とともに来日し[85]、同九年八月まで、開成学校・東京開成学校において英文学を講じ[86]、また、同十三年六月から二年間、札幌農学校で語学を教授し[87]、その後、築地居留地三十三番欧文正鵠学館主となった[88]人物である。

築地でまなんだ岡倉由三郎や内藤湖南[89]に、サマーズはイソップをもたらしたかもしれぬ。口誦は活字よりも、文化接触の三契機、〈個性〉・〈文化〉・〈状況〉のいづれもを、より「人間的」にする。換言するならば、〈個性〉の契機が強調せられるゆえ、サマーズによってイソップがかたられていたとするならば、サマーズのイソップは、『意拾喩言』系統本の閲読とはまたことなる趣をもって、受け手に伝達せられたに相違ない。ちなみに、対応す

る英文は、『意拾喩言』とは別箇のものである。

一八四三年に、『意拾喩言』の新嘉波版が刊行せられた。すなわち、福建語に翻訳せられた第一部と、広東語に翻訳せられた第二部とであって、前者は Samuel Dyer と John Stronach とにより、[90] 後者は Stronach ひとりの手になるものである。[91]

かくして、一八四〇年広東版を祖本とするならば、その、上海、香港、新嘉波への伝播をしり、また、『中華文理』の存在をしった。しかしながら、わづかにこころみられたところは、日本における写本・翻刻を手がかりとするものでしかない。

さらにまた、『意拾喩言』は澳門において出版せられることはなかったのであろうか。[92] あるいはまた、朝鮮半島や越南において受容せられることはなかったのであろうか。朝鮮半島には、邦訳の影響を看取しえぬのであろうか、といった問題も継起する。

すべて、這回のささやかなこころみには手にあまる課題のみではあるが、最後にたまごの題名のバリエイションをかかげて、ある程度の時空を包摂しえぬでもない可能性をしめしつつ、「玉子焼」の話をもってはじめられた小攷の暗喩としよう。

庭鳥金の卵を産む事（伊曾保物語）

鶩生金蛋（意拾喩言）

黄金の玉子を生む鶩鳥の事（童蒙をしへ草）

鶩黄金の卵を産む話（通俗伊蘇普物語）
황금알을 낳는 암탉（이솝寓話集）
生金蛋的鸡（伊索寓言选）[93]

註

(1) イソップ譬喩談に関しては、仮名草子以外、初出および原稿を原拠とし、註記を省略する。一般に、引用に際しては、字体を通行のものにあらため、振仮名の過半、ならびに、圏点・傍線をはぶき、イタリックを再現せぬ。したがって、引用文中の圏点はすべて引用者によるものである。

(2) The English Catalogue of Books, Vol. I, London, 1864, p. 535.

(3) もとより、後刷を排除せぬ。以下、一八三九年版を原拠とし、一八七二年版によって対校する。

(4) 新村「『伊曾保物語』の漢訳」、『新村出全集』7（昭和四十八年、筑摩書房）四一四ページ。

(5) 明治文学全集1一三九ページ。なお、叢書類に関しては、刊年・版元の註記を省略する。

(6) 村垣「遣米使日記」、『遣外使節日記纂輯』一、五〇ページ。

(7) 『大久保利通文書』六、二一六ページ。

(8) 『慶應義塾入社帳』二（昭和五十五年、慶應義塾塾史資料室）四二ページ。

(9) 前掲『慶應義塾入社帳』二、四三ページ。

(10) 高橋義雄編『福澤先生を語る諸名士の直話』（昭和九年、岩波書店）一九一ページ。

(11) 朝吹「旧話」、福澤先生研究会編『我が福澤先生』（昭和六年、丸善）二四三ページ。

(12) 「年譜」、明治文学全集8四一五ページ。「今日も鶏卵明日も鶏卵」という、福沢自身による回想もある。「主義の食傷」、『時事新報』明治十五年十二月十一日。なお、『時事新報』は覆刻版（龍渓書舎）による。

(13) 福澤「慶応三年日記」、『福澤諭吉全集』19（昭和四十六年再版、岩波書店）一五五～一五六ページ。

(14) 丸山真男「福沢諭吉について」、昭和三十三年十一月十日『図書』一一〇号七ページ参照。

(15) 『福翁自伝』（新訂、岩波文庫）二七九・二八〇ページ。

(16) 前掲『福翁自伝』二八〇ページ。

(17) この際、「いなご」の、明治初年、ならびに、中津方言における意味を確認することは不要であろう。
(18) 『国民新聞』明治三十四年一月十三日。なお、『国民新聞』はマイクロフィルムによる。
(19) 明治文学全集8二八三ページ。
(20) 『時事新報』明治二十二年二月六日。
(21) 巻之六に「明治八年十一月十三日版権免許」としるされたものがあるところからの推定。松崎實「通俗伊蘇普物語解題」、『明治文化全集』飜訳文芸篇一三～一四ページ。
(22) 福澤英之助訳『訓蒙話草』上の見返しには、「明治六年十二月発兌」とある。
(23) 前掲「通俗伊蘇普物語解題」、七ページ。
(24) ただし、「蟻と蠶蠡の話」本文末尾に「(経)」とあって、「例言」によれば、これは「経済説畧にある話説(はなし)を撮合(とりあは)せて訳したるもの」という。『経済説畧』未見。
(25) 日本古典文学大系90四三二～四三三ページ。
(26) 日本古典文学大系90三六一ページ頭註参照。
(27) 日本古典文学大系90四一八ページ。同四三二ページ頭註参照。
(28) 日本古典文学大系90四三二ページ頭註参照。
(29) 日本古典文学大系32一〇四ページ。
(30) 日本古典文学大系41四四ページ。
(31) 日本古典文学大系32九九ページ。
(32) 『英文伊蘇普物語』では、Winter finds out what Summer lays by.
(33) 透谷「みゝずのうた」、明治文学全集29五〇ページ。
(34) 『朝野新聞』明治十五年一月十日。なお、『朝野新聞』は縮刷版(べりかん社)による。
(35) 『朝野新聞』明治十四年十二月一日。
(36) 『時事新報』明治二十二年二月六日。
(37) 『郵便報知新聞』明治十二年四月二十五日。「小引」。なお、『郵便報知新聞』はマイクロフィルムによる。
(38) 前掲「通俗伊蘇普物語解題」、八ページ。
(39) 『郵便報知新聞』明治十二年四月二十五日。

(40) 『荘子』一（岩波文庫）二〇三ページ。
(41) 「伝統化」については、岡義達『政治』（岩波新書）九二ページ以下を参照。
(42) 譚嗣同は、「中国は君権が過大である」という「西洋人」の説に賛意を表している。譚『仁学』（岩波文庫）一四〇ページ。
(43) 前掲「『伊曾保物語』の漢訳」、四一八ページ。
(44) 马祖毅『中国翻译简史』（一九八四年、中国对外翻译出版公司）二〇二ページ。
(45) 番号には「31」の重複があり、「81」でおわっている。なお、後掲乙表の『意拾喩言』の番号は東洋文庫本のママ、ただし、乱丁は訂した。
(46) 前掲『『伊曾保物語』の漢訳」、四一五ページ。
(47) 日本古典文学大系90四一六ページ頭註。
(48) 日本古典文学大系90四一六ページ。
(49) そこにおいて、カエルは「水蛇」の餌食となる。『イソップ寓話集』（改版、岩波文庫）六五ページ。
(50) Morrison, R.: A Dictionary of the Chinese Language, Part III, London, 1822, p. 190.
(51) Latourette, Kenneth Scott: A History of Christian Missions in China, London, 1929, pp. 260～263.
(52) 『管子』（漢文叢書）四九四ページ。
(53) 貝塚茂樹『諸子百家』（岩波新書）一一二～一一三ページ。
(54) 『英文伊蘇普物語』口絵を引照すれば、渡部手沢本はジェイムズの一八四八年初版ではない。Johnson, Scott: The Illustrations for a Victorian Aesop and a Meiji Isoppu,『関西大学東西学術研究所紀要』16（昭和五十八年）五一ページ参照。
(55) 写本『伊娑菩喩言』にくわえられた、「安政三年丙辰陽月」、山県半蔵の跋文。前掲「『伊曾保物語』の漢訳」、四一六ページによる。
(56) 大英博物館に架蔵せられる『伊娑菩喩言』は一八九〇年の香港版という。ロバート・K・ダグラス編『大英博物館所蔵漢籍目録・補遺篇』（昭和六十二年翻刻、科学書院）一ページ。
(57) 福沢も、「白頭朱圏」において、「斉人妻妾」を脚色している。『時事新報』明治十五年三月三十日。
(58) 卓南生「「遐邇貫珍」（1853～56）—香港最初の華字月刊紙についての考察—」、『応用社会学研究』19（一九七八年）一四五ページ。
(59) 明治文庫蔵の複写による。
(60) 松陰「丁巳幽室文稿」、『吉田松陰全集』3（昭和十年、岩波書店）二四二ページ。前掲『『伊曾保物語』の漢訳」、四一六ページ参照。
(61) 前掲「『伊曾保物語』の漢訳」、四一七ページ。

(62) 前掲「丁巳幽室文稿」、二四二ページ。前掲『伊曾保物語』の漢訳」、四一六ページ参照。
(63) 『郵便報知新聞』明治十年五月九日。ちなみに、「漢文も巧みに諧謔の状態を写した」という評があった。『朝野新聞』明治九年十一月十二日。
(64) このころ漢語学習の気運がもりあがったか、慶應義塾に「支那語科の設置されたるは明治十二年」という。『慶應義塾五十年史』（明治四十年、慶應義塾）三五三ページ。明治十三年十二月七日付『郵便報知新聞』は、「近頃支那との貿易を盛んにせざるべからずといふ処に注目する人少からざる故にや」として、慶應義塾のほかに、興亜会、文部省、柳橋多紀氏、名古屋某校が「支那語学の義塾を開」いているとつたえている。
(65) 新村出「伊曾保物語展観目録」、前掲『新村出全集』7五〇〇ページ。
(66) 『明治文化全集』新聞篇二五九～二六〇・三三二・三三八ページ。
(67) 明治文庫蔵の第「二冊」以下（20・27～33・35・40・43～45・53）において、三十五号のみが同欄を有する。
(68) 『朝野新聞』明治十八年六月九日。
(69) 松波正信「痴鴉ノ話」、明治十三年二月五日『翠紅雑誌』一号五丁オモテ。
(70) 内田魯庵「政治小説を作るべき好時期」、明治文学全集24一九六ページ。
(71) 『朝野新聞』明治二十三年四月十八日。
(72) 竹越『新日本史』、明治文学全集77二三ページ。
(73) 小野田翠雨『現代名士の演説振―速記者の見たる―』、明治文学全集96三六三ページ。
(74) 森鷗外訳『即興詩人』上（岩波文庫）八〇ページ。
(75) 平塚益徳「英華学堂考」、『九州大学教育学部紀要』8（一九六一年）八ページ。
(76) 『郵便報知新聞』明治十年五月九日。
(77) 卓南生「官板華字新聞および中国語原紙について」、日本初期新聞全集1Vページ。
(78) 前掲山県の跋文。
(79) Couling, Samuel: The Encyclopaedia Sinica, Shanghai, 1917, p. 344.
(80) 前掲「「遐邇貫珍」（1853～56）」、一五四ページ。
(81) 坂野正高『近代中国政治外交史』（一九七三年、東京大学出版会）二三一ページ。
(82) 前掲「「遐邇貫珍」（1853～56）」、一四七ページ。

(83) Medhurst, W. H.: Chinese and English Dictionary, p. 2・p. 670.
(84) Medhurst, W. H.: English and Chinese Dictionary, p. 631.
(85) The Japan Weekly Mail, Oct. 11, 1873. なお、『ジャパン・ウィークリー・メイル』は複写による。
(86) 『東京大学百年史』通史一（昭和五十九年、東京大学出版会）三三八ページ。
(87) 『北大百年史』札幌農学校史料㈠（一九八一年、ぎょうせい）四九〇ページ。
(88) 『時事新報』明治二十年一月十七日。
(89) 重久篤太郎『日本近世英学史』（昭和十六年、教育図書）三六八～三六九ページ。
(90) Catalogue of the Asiatic Library of Dr. G. E. Morrison, Part I, Tokyo, 1924, p. 246.
(91) 鹿田文一郎「スロース訳述「意拾喩言」について」、昭和二年二月二十日『書史』一冊三ページ。
(92) 鈴木券太郎「「意拾喩言」補遺」に、この可能性についての言及がある。昭和二年五月二十日『書史』二冊一六ページ。
(93) この表題の書物は、一九五五年と一九八八年の両度にわたって出版せられているが、いまは後者によった。なお、イソップ譬喩談の漢訳としては、今世紀初頭の林紓『伊索寓言』が著名であるが、この翻訳は蔵復の子ふたりの協力によって成立した。曾錦漳「林译的原本」、薛绥之・张俊才编『林纾研究资料』（一九八二年、福建人民出版社）三三八ページ。ちなみに、朝鮮半島においては、一九四六年に『이솝이야기』が刊行せられ、一九七五年には『이솝寓話集』が乙酉文庫におさめられ、また、絵本もおこなわれているが、戦前の情況についてはつまびらかでない。

甲表：『ローマ字雑誌』、「こどものため」の話

号	題名	訳者名表示	渡部訳の番号
1	獅子と鼠の話		24
2	父親と息子どもの話		57
3	狼と子羊の話		19
4	蟻と蟋蟀の話＊		5
	田舎者の話		
	盗人の話		
5	あほう鴉の話＊		4
	老いたる犬の話＊		12
6	こわれた鉄沓（ドイツの話）		
	蛙と鼠の話＊		15
	子羊と狼の話＊		8
7	犬と鶏と狐の話＊		25
	兎と亀の話＊		27
8	風と日輪の話＊		43

乙表：漢訳系統本の内容

『意拾喩言』	重山文庫本	栗本本（上）	阿部訓点本	小野訓点本
1 射羊	1	1	1	38
2 雞公珍珠	2	2	2	10
3 獅熊争食	3	3	3	11
4 鵞生金蛋	4	4	4	12
5 犬影	5	5	5	13
6 獅驢同猟	6	6	6	14
7 射求白雉	73		73	73
8 二鼠	7	7	7	15
9 農夫救蛇	8	8	8	16
10 獅驢争気	9	9	9	17
11 獅蚊比藝	10	10	10	18
12 狼受犬騙	11	11	11	20
13 驢穿獅皮	12	12	12	19
14 百姓と息子の話＊				44
15 胃袋と手足の話＊				35
16 羊飼の童			○	
17 驢馬と狆の話＊				46
18 百姓と鶴の話＊				53
19 木と斧の話＊				45
20 蛙と牛の話			○	26
21 鴉と狐の話			○	129
22 狼と鶴の話				3
23 鶏と珠の話				7
24 田舎者と蛇の話				14
25 狐と獅子の話				11
26 蟻のふるまい英雄の心をうごかす			○	
27 鶴と狐の話			○	109
28 薪の束の話＊				57
29 鴉挿仮毛	13	13	13	21
30 鷹亀	14	14	14	22
31 亀兎	15	15	15	23
32 雞闘	16	16	16	24
33 黒白狗朓	17	17	17	25
34 狐指罵蒲提	18	18	18	26
35 孩子打蛤	19	19	19	27
36 蛤朓水牛	20	20	20	28
37 鷹猫猪同居	21	21	21	2
38 馬思報鹿仇	22	22	22	3
39 蜂針人熊	23	23	23	4
40 猟戸逐兎	24	24	24	5
41 四肢反叛	25	25	25	6
42 鴉狐	26	26	26	7
43 裁縫戯法	27	27	27	8

52	51	60	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	31	30	29
鹿入獅穴	鹿求牛救	斧頭求柄	羊與狼盟	毒蛇咬鉈	蛤求北帝	報恩鼠	驢犬妬寵	鼓手辯理	雞抱蛇蛋	鹿照水	戰馬欺驢	獅主責犬	大山懷孕	束木臂喩	鴉効鷹能	鴈鶴同網	斉人妻妾	老人悔死	愚夫求財	眇鹿失計	牛狗同羣	狐與山羊	瓦鉄缸同行	洗染布各業
50	49	48	47	46		72	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	33			32	31	30	29	28
50	49	48	47	46		72	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	33			32	31	30	29	28
50	49	48	47	46		72	45	44	43	42	41	40	39	1	37	36	33			32	31	30	29	9
77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53
鼠妨猫害	人獅論理	牧童説謊	猴君狐臣	野猪自護	意拾勧世	荒唐受駁	杉葦剛柔	業主貪心	鴉欺羊善	指頭露奸	縦子自害	鶏鴿同飼	愚夫痴愛	狼断羊案	狼計不行	馴犬野狼	驢不自量	驢馬同途	鳥悞靠魚	義犬吠盗	車夫求仏	狐鶴相交	農夫遺訓	日風相賭
70		69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59		58	34	57		56	55	54		53	52	51
70		69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59		58	34	57		56	55	54		53	52	51
70		69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59		58	34	57		56	55	54		53	52	51

81	80	79	78
直神見像	老蟹訓子	鰍鱸皆亡	星者自悞
	35		71
	35		71
	35		71